PRI・Oトップ対談 Vol.11

放送作家・脚本家
グリーンプリンティングＰＲ大使
小山 薫堂

PRI・O トップ対談

大阪府印刷工業組合 理事長
浦久保 康裕

ハッピーの連鎖を生み出す仕事を

今回のゲストは、初代「グリーンプリンティングＰＲ大使」で2025年大阪・関西万博のプロデューサーでもある小山薫堂氏。放送作家・脚本家としてのさまざまな執筆活動を通じて印刷産業とかかわりの深い小山氏に、印刷が創り出す幸せな未来とその可能性などについてお話を伺いました。

2016年グリーンプリンティング PR大使就任

浦久保： 小山さんは2016年から日本印刷産業連合会の「グリーンプリンティング（以下GP）PR大使」として活躍されています。就任されてから印刷に対する見方、関わり方に変化がありましたか？また、最近の取り組みで「エッセンシャルワーカー（生活維持に欠かせない職業に就いている方々のこと）の皆さんへの感謝のポストカード」の作成がありますが、コロナ禍でのこのプロジェクトに対する思いをお聞かせいただけますか？

小山： はじめに、私がGPのPR大使になったきっかけからお話しさせていただきます。東京のグラビヤ印刷の会社、㈱巧芸社の山下雅稔社長のご紹介で就任しました。山下さんはGP推進の委員会に属しておられて、GP認証の認知度向上を図りながら、啓発から普及を加速させるため、印刷と親和性がある私が推薦され、約5年前からGPのPR大使としての活動をスタートしました。

まずは一般公募で「印刷と私」というテーマのエッセイ・作文コンテストを実施しました。そうしますと期待以上の応募数と素敵な内容で、印刷が日常生活を超えて人生にまで影響を与える！そんな可能性が見えてきました。

2020年はこのコンテストを中止し、それに代わる企画として、「エッセンシャルワーカーの皆さんへの感謝のポストカード」を制作することにしました。このポストカードは、こうしている今も自らの感染リスクも顧みず私たちの命を救うために医療現場で闘っている医師や看護師の皆さんをはじめ、公共交通機関、スーパー・コンビニ・ドラッグストアなどの販売員、介護士・保育士、清掃業など私たちの毎日の生活インフラを支えてくれている多くのエッセンシャルワーカーの皆さんへ、印刷業界としても感謝と応援の気持ちを表したく、制作したものです。

「感謝のポストカード」の感謝と応援メッセージは私が作成し、イラストレーターの小池アミイゴ氏には心の癒しと支えになる作画をお願いしました。

グリーンプリンティングYouTubeチャンネル
https://www.youtube.com/channel/UC6QkpQJNP3gGygq5YlUa06w

感謝のポストカード「心のバトン」

効率化ばかりではなく適度な余白が必要

浦久保： 放送作家新人時代、手書き台本がガリ版刷りの本になって胸踊らせた体験を持たれ、その後、活版文字の美しさについて「印刷は尊い」と表現されています。ご自身の印刷原体験でしょうか？

小山： 最初の印刷との接点は、私が大学生時代に遡ります。当時私の叔父が新小岩で製本工場を営んでいまして、そこに下宿させてもらっていたんです。その叔父は富山県出身の堅物で、私が少し遅く帰っただけで厳しく叱るわけです。なので印刷に携わる人って、すごく堅物で融通の利かない人っていう印象が付いてしまっていました。ところが文化放送でアルバイトをしたことでその考えが変わりました。アルバイトでも一流の放送作家さんの編集作業に立ち会ったりするなかで印刷会社の方々と一緒に台本の作成作業に関わる機会がありました。その過程で印刷についての知識を得ることができました。大学在学中に『11PM』で放送作家としてデビューして、私が書いた脚本が印刷された台本としてでき上がってきた喜びはひとしおでした。

浦久保： 先日、私の小学生の娘が学校からタブレットを持って帰って来て、「これからこれも使って授業するの」って言うわけです。授業の効率化よりも小学生という多感な時期だからこそ、紙の教科書から伝わってくる文化・匂い・手触りからシズル感を重視することで、人間の本質として重要な感性だとか情緒的なことを養えるのではないかと思うのですが、小山さんはどうお考えでしょうか。

小山： 最近の社会の風潮と照らし合わすと、環境に配慮するために紙をなくす、と単純に思われていることが往々にして見受けられます。タブレットなどを使った授業になると、ほんとうにつまらない世の中になってしまう。まさに浦久保さんのおっしゃるとおりだと思います。デジタルからはインスピレーションが生まれることはほぼないので、新しいアイデアや感性が生まれにくいように思います。デジタルは時系列に整理された事柄を調べたり保管したりするのに優れていますので、どう使い分けるのかが重要だと思います。

単に早く移動する手段として高速道路を使うことはありますが、その区間の一般道にあるお店の商品や地場産業に出会うことはありません。たまたま交通渋滞で一般道に降りてみたらまったく違う景色が広がるわけです。何を言いたいかと申しますと、人生には「余白」が必要だということです。タブレットにしたからといって環境に配慮することにはなりません。効率化ばかりを目指さずに適度な余白という“無駄”を作っていくことが特に幼少期には必要だと思います。

技術力の発展によって、便利になる反面で衰退する人間の機能ってありますよね。例えば今はほぼすべての車に搭載されているバックモニターが典型的な例になると思います。昔は目視と感覚で縦列駐車を行っていましたが、今はカメラがないと怖くて駐車できません。便利な機器に頼ることによって、人間の本質的機能が失われてしまうわけです。

「いのち輝く未来社会のデザイン」2025年の国際博覧会に向けて

久保： 2025年の大阪・関西万博で10人のプロデューサーの中のお一人に就任されました。テーマ事業プロデューサーとして「いのちをつむぐ」をテーマに、「食」を軸に「いただきます」の精神を発信すると伺っています。その狙いや具体的な取り組みをお聞かせ願いますか？また、その精神の発信に印刷業はどんな貢献ができるでしょうか？

小山： 1970年のEXPOは高度経済成長の真っただ中だったので、日本のインフラ整備の一環という部分もありましたが、今の日本にそれは必要ありません。私が2025年の大阪・関西万博というビッグイベントの「食」というテーマを担当するにあたって、まず足元を見つめることから始めました。目先の事だけではなくて、皆が同じ方向の未来を見つめることを意識しました。そのなかで「この指止まれ」って手を挙げた時にみんなが共感して、同じ方向を向いてくれる吸引力として「いのちをつむぐ」をテーマに掲げました。

食と印刷との関係っていうと、どうしても単純にパッケージなどにいきがちですが、「いのちをつむぐ」というテーマでコラボレーションすることによって、新たな価値を創造することは可能でしょうか？

浦久保： 通常の印刷技術で考えますと、生産者を見える化したり、おいしさや機能を表現したりしています。また、インキ自体に機能を持たせた抗菌ニスや香料インキなどを使うこともあります。食品にダイレクトに印刷が可能なので、印刷にはさまざまな可能性があると思います。あとはアイデア次第だと思いますので、「いのちをつむぐ」というテーマで印刷業で何ができるかを仲間と共に考えてみたいと思います。

人を喜ばせることに幸せを感じる

浦久保： 小山さんの会社（オレンジ・アンド・パートナーズ）の社是に「その仕事は新しいか？その仕事は楽しいか？その仕事は誰を幸せにするか？」とあります。またハッピーの連鎖を生み出すことが仕事だとも発言されています。万博でのお仕事は、どんな幸せを創り出すのでしょうか？私たち印刷業もスローガンとして「人々の暮らしを彩り幸せを創る・ハッピーインダストリー」を掲げています。未来に向けて印刷業がなくてはならない産業として存在するためには何が必要とお考えでしょうか。

小山： 私の父がそうだったように、私も人を喜ばせることに幸せを感じるのだと思います。お年玉袋に100円札を100枚入れてくれたり、10万円金貨をふとした時にプレゼントしてくれたり、何か行動をするたびに「こんなことしたら、どんな反応があるだろう」って考えながら実践するタイプだったんだと思います。

今年の年賀状には10枚のナフキンを入れて送りました。ナフキンには「いただきます」と印字をしていまして、お正月に食べた料理とこのナフキンを一緒に撮影してインスタグラムにアップしてもらう。その中で素敵な作品には賞品をお渡しするという企画を実施しました。また昨年は、「1年後の自分に対して手紙を書いてください」という内容の往復はがきを送りました。返信いただいたご自身への手紙を1年間保管して、お送りするわけです。1年後には相手も忘れているので、届いたらビックリしますよね。

人を喜ばせたりハッピーにすることは、アイデア次第でいくらでも印刷でできると思います。

浦久保： 人を喜ばせることで幸せを感じるって、実は人間の本能なのかもしれませんね。我々の印刷業界がこのハッピーの連鎖のお手伝いをもっと積極的に行っていきたいものです。本日はご多忙のなか、ありがとうございました。

大阪印刷会館にて（左より福山広報委員長、西岡広報委員、小山氏、浦久保理事長、家田副理事長）

PROFILE

小山 薫堂（こやま くんどう）

放送作家。脚本家。1964年熊本県生まれ。日本大学芸術学部放送学科在籍中に放送作家としての活動を開始。「料理の鉄人」「カノッサの屈辱」など斬新なテレビ番組を数多く企画。映画「おくりびと」で第32回日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第81回米アカデミー賞外国語部門賞を獲得。執筆活動の他、京都芸術大学副学長、京都市「京都館」館長など地域・企業のプロジェクトアドバイザー、下鴨茶寮主人、日本国際博覧会では、エリアフォーカスプロデューサーを務める。「くまモン」の生みの親でもある。